手仕事をたずねる＊8

ぬくもりの金属 海外進出

＊錫器（すずき）（富山県高岡市）

金属製の四角い網の一辺を上に引っ張ると、「ピキピキッ」と音がして、簡単に引き上げられる。さらに4辺を引き上げると、果物などを入れられるバスケットになった。

金属なのに変幻自在。それが錫の特徴だ。富山県高岡市の鋳物メーカー「能作（のうさく）」は、この錫を使った生活雑貨を手がけている。

鋳物の街、高岡。大正時代に創業した能作は10年前まで、卸問屋の注文に従い、銅や真ちゅうの仏具、茶道具などを作ってきた。ところが、近年は安価な外国製品の流入や景気の低迷などで、産業の勢いは陰りがち。暮らしに密着した新たな製品の必要性を感じていた時に4代目社長の能作克治さん(52)は、錫と出合った。

錫は奈良時代以降、茶器や酒器などに用いられてきた。軟らかく加工しづらいという弱点を、「冷たく硬いという金属のイメージを覆す製品を作れる」と前向きにとらえた。

錫器は、溶かした金属を鋳型に流し込み、金属が固まってしまえば、ほぼ完成。実際、工場で働く約20人の「鋳物師」も流れ作業のように与えられた仕事をこなしていた。

しかし、経験を積むことでしか得られない微妙な感覚が作品の出来を左右する。例えば、鋳型作り。何十年も繰り返して使っている真っ黒い砂を無造作に詰め込んでいるだけのように見えるが、製品の形に応じて部分的に固め方に強弱をつけ、錫を流し込むための数ミリ幅のすき間を崩さないよう細心の注意を払う。

「マニュアルなんてありません。良いものを作るには、職人たちの勘が頼りです」

錫が軟らかいため、仕上げの研磨などができず、器表面には細かな砂の模様が残っていたり、縁のラインが微妙にゆがんでいたり。決して洗練されているとは言えないが、それが手づくねで作った陶器のような味になる。

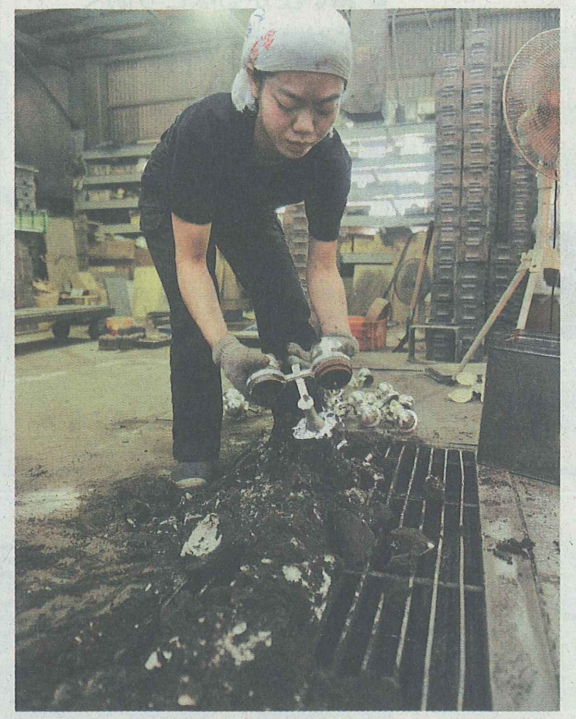
「錫ってどんな金属と聞かれると、ぬくもりのある金属って答えているんですよ」と能作さん。錫の軟らかさに加え、職人たちの丁寧な手仕事が商品にぬくもりを加える。

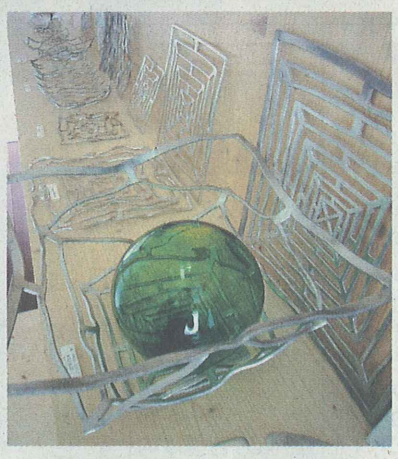
錫器を作り始めて6年。昨年初めて年間売り上げが1億円を超えた。今年1月には、パリで開かれた国際見本市にも出展し、海外から注文が入るように。その反響の大きさに手応えを感じている。

伝統に培われた技術は持っている。それを生かすための発想の転換ができれば、まだまだやれる――。手仕事の現場を訪ね、その思いを尋ねることで、日本のもの作りの豊かさと可能性を実感することができた。

（斎藤圭史）

（おわり）





上軟らかい錫器は鋳型から取り出す際にも慎重さが求められる
下四角い格子状の網がバスケットに変わる（富山県高岡市で）＝細野登撮影

メモ　高岡市は鋳物作りで400年の歴史を誇る。能作の錫製品にはビール用のコップ、はし置きなどもある。東京の日本橋三越本店の「高岡能作」で購入できる。FAX（0766・63・5510）でも注文を受け付けている。問い合わせは、能作（0766・63・5080）へ。

くらし 家庭

慢話ばかり

結婚10年の30代主婦。昨年子どもが生まれました。

夫の姉のことで悩んでいます。義姉は面倒見が良いのですが干渉してくるタイプ。弟である夫にまめにメールし、荷物も送ってきます。「我が家は皆元気よ～」といったメッセージ付き遣う内容も書かれているそうです。そのため義姉との関係を夫に相談しても「姉はお前を気遣っている。何が不満なんだ」。

子どもが生まれてから、義姉のやきもちが反響。かわいらしいデザインの物など二…す。二…京稿は…

◇テキスタイル展　23～28日午前10時半～午後6時半、東京・京橋の千疋屋（せんびきや）ギャラリー。武蔵野美術大学の大学院生8人が、自分で染め、織り、縫ったテキスタイル（布）を展示。麻、ポリエステル、和紙などの素材で、美術作品としてのテキスタイルを制作したという。無料、日曜休み。問い合わせは、同ギャラリー（03・3281・0320）へ。